

『老人は夢を見、若者は幻を見る』井上隆晶牧師  
ヨエル書2章23節～3章5節、使徒言行録2章1～13節

### ①【聖霊は、それを待つ人たちに降る】

今日は聖霊降臨祭です。復活祭、クリスマスと並ぶ三つ目の大きな祭りです。イエス様が復活して50日目の祭なので「五旬祭（50日祭）」ともいい、ギリシャ語では「ペンテコステ」といいます。今日は聖霊について学びましょう。霊という漢字が使っていると幽霊のように思うかもしれませんが、ヘブライ語では「ルアッハ」といい、ギリシャ語では「プネウマ」といって、「風」とか「息」という意味です。目に見えないので「霊」という字を使ったのですが、正教会では「霊」と書かないで、「聖神<sup>o</sup>（せいしん）」と書いています。聖霊は神の口から出る神の息です。

さて、復活したイエス様は40日目に天に帰られたので、残された弟子たちにとって唯一の頼みはイエス様が残して言った約束だったと思います。「父は別の**弁護者を遣わしてください。**」（ヨハネ14:16）、「**弁護者をあなたがたのところに送る。**」（ヨハネ16:7）と繰り返し弟子たちに聖霊が来ることを教えられました。復活した後もそうです。「**前にわたしから聞いた、父の約束されたものを待ちなさい。**」（使徒1:4）、「**わたしは、父が約束されたものをあなたがたに送る。**」（ルカ24:49）と言われ、ひたすら聖霊を待つように命じられました。ここから分かるのは、**救いというのはイエス様の十字架と復活という業で終わりではなく、続きがある**ということなのです。別な言い方をすれば**聖霊を受けて、救いは完成する**ということなのです。そこで弟子たちはエルサレムに戻ると、泊まっていた部屋（最後の晩餐をした部屋）に上がり、約束された聖霊を待ちました。「**彼らは皆、婦人たちやイエスの母マリア、またイエスの兄弟たちと心を合わせて熱心に祈っていた。**」（使徒1:14）と書かれています。ペンテコステのイコンがマリアを中心に描いているのは、母マリアも使徒の群れと一緒にいて祈っていたからです。

彼らは聖霊がどのような方か、良く知っていたわけではありませんでした。しかし彼らにとってもうこの聖霊（弁護者）しか頼れる者がなかったのです。私はそのことがとても重要なことだと思います。聖霊はよく分からない？という人がいます。分からないから求めないのでしょうか。でも分からなくて良いので求めることが大事なのです。皆さんは弟子たちの様に、「**聖霊よ、来てください**」と必死に求めたことがありますか？聖霊を待ったことがありますか？聖霊は求めない人には来ません。「**世は、この霊を見ようとも、知ろうともしないので、受け入れることができない。**」（ヨハネ14:17）と主は言われました。聖霊を知ろうとしないのは、世の人だけでなく実はクリスチャンでもそうなのです。

●アントニー・デ・メロはこう言っています。「**聖霊は待つ者にのみ与えられる。来る日も、来る日も、神とそのみ言葉に祈りをもって、その心をさらし続ける者**

に、生産性重視の目にはまったくの時間の浪費としか映らないものに何百時間も投資して惜しいと思わない者に、聖霊は与えられる。」「聖霊に対する罪とは、この方は世界を変革することができるとは信じられない、この方が私を変え得るとは信じられない、というその不信のことだ。このような人は、神を信じると口で告白しながら、実践的な無神論者になっている。」

ですから聖霊を本気で求めましょう。「聖霊よ、来てください」と祈りましょう。

## ②【聖霊降臨は宣教と関係する】

聖霊が降った時の様子を読んでみましょう。「五旬祭の日が来て、一同が集まっていると、突然、激しい風が吹いてくるような音が天から聞こえ、彼らが座っていた家中に響いた。そして、炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。一同は、聖霊に満たされ、霊が語らせるままに、他の国々の言葉で話し出した。」(1~4節) この日、天から激しい風が吹くような音とともに聖霊が降り、炎のような舌が分かれて、一人一人の上にとどまると、彼らは聖霊に満たされ、いろいろな国の言葉で神の偉大な業を語り始めました。「激しい風」は「神の息」を現わしており、「炎の舌」は、「神の舌」を現わしています。聖霊が弟子たちの上に降ったのは、神の舌で、神の偉大な業を世界中に語らせるためでした。ですから聖霊降臨祭は「世界宣教の始まり」がテーマなのだという事が分かります。聖霊は宣教する教会を造ったのです。しかも「霊が語らせるままに」(使徒2:4)と書かれています。聖霊が宣教の主体であって、決して人間ではないということです。伝道や宣教は三位一体の神の業であって、それをラテン語で「神の宣教(ミッシオ・デイ)」といいます。英語でミッションですね。私たちは自分で頑張っただけで伝道するものではありません。頑張っただけでイエス様のことを伝えて、信徒を増やすのでもありません。神が行け！と命じる所や人の所に遣わされ、語れ！という言葉が語られるのです。ある牧師が私に「先生、伝道したいんだけど、聞いてくれる人がいない」と言うので「先生、出かけて行かないと駄目ですよ。イエス様は出かけて行って実を結ぶように私たちに任命した(ヨハネ15:16)のですから。」と言いました。私は教会が内側を向くのではなく、外を向いて欲しいと思います。集まったら「どこが痛い、しんどい」という話ではなく、宣教の話であってほしいと思います。

## ③【神の息を吸いなさい】

人間が生きているか死んでいるかは、息をしているかどうかで分かります。息をしなくなると動かなくなり、やがて硬くなり冷たくなります。赤ん坊がこの世に生まれて来る時、体は出来上がっていますがまだ息をしていません。息を吸って産声を上げて、初めて「生きる者」になります。最初のアダムも同じでした。神は土から人を造り、最後に鼻に「命の息」を吹き入れると、生きる者となりました。息は最後に入ります。聖餐式でもそうです。イエス様の制定の言葉を読み、

最後に聖霊を呼び求めて、聖体になります。使徒言行録でも同じなのです。キリストによってすでに教会共同体は創造されていました。そこへ最後に聖霊が「神の息」を入れたのです。そうやって教会は動き出したのです。私たちも同じです。私たちも神の息である聖霊をいただいて救いは完成するのです。聖霊を求めなければならぬ理由はここにあります。すべてのクリスチャンは最初、聖霊が働いたので信仰を持ったのですが、その後、聖霊は求めなければ去ってしまいます。聖霊は入ったり、離れたりするからです。聖霊を求めないクリスチャンは信仰の知識はあっても、どんどんこの世的になってゆきます。そしてすべてを神抜き（聖霊抜き）で、つまり人間の力と知恵で行おうとするようになります。

●私はアレルギー性鼻炎なので、すぐに鼻がつまります。すると呼吸が苦しくなるのでいつも薬を手離せません。子どもの頃は小児ぜんそくで、遊びすぎると、必ずぜんそくを発症しました。息を吸うのが苦しくて、吸う度に「ヒュー、ヒュー」と音がするのです。横になると息を吸いにくくて苦しいので、壁に寄りかかって寝ました。この世の息を少しでも吸わなければ息苦しくなるように、聖霊という息を吸わなければ苦しい、一瞬たりとも生きれないとならなければいけないのです。聖霊は、私たちが呼吸をするのと同じくらいに、絶えず求めなければならぬのです。

●コルベ神父は普段は、短気で、がんこな人だったようです。彼は最初から立派な人であったのではなく、徐々に殉教者コルベ神父になっていたのだとある本の中に書かれてありました。洞爺丸が沈没し、自分の浮き輪を他人に与えて死んでいったストーン宣教師は普段は目立たないとても静かな人で、暴飲暴食をせず、何事も控え目な人だったそうです。でも彼らの共通点があります。毎日神に祈り、神と交わっており、最後は自分の命を隣人に与えて死んでいったということです。祈ることによって、徐々に聖霊が満ちて来て、キリストと同じような生き方をすることができるように聖霊はその人を造り変えるのです。そこに私たちは希望があります。

今日の説教題に、老人は夢を見、若者は幻を見るという題をつけましたが、私たちには聖霊によって大きな希望が与えられています。私たちは二つの息を持っているのです。人間の息と、神の息です。人間の息はこの世で終わりますが、神の息は永遠に続きます。なぜなら神は死なないので、永遠に呼吸しているからです。イエス様は「父は別の弁護者を遣わして、永遠にあなたがたと一緒にいるようにしてください」（ヨハネ 14：16）といわれました。聖霊という神の息が私たちの中に永遠に共にいてくださるなら、私たちはずーと呼吸する者となるのです。何というすごいことでしょう。たえず祈り、聖霊という神の息吹を吸って、この世では聖霊に動かされる者となり、来世では永遠に生きる者にさせていただきますよう。